とともに印象に残っております。校庭には今はその影もないが、大きな桜の木と、いちょうの大木が二階の屋根近くまでそびえていて、春は松葉に、桜の花びらをさし、秋はいちょうの押葉をしたものです。

そのころは現在の様に産児制限の影響はなく、「生めよ、ふやせよ」の時代で、空襲で疎開した人もあって、私たちの組も六十数人はいたものでした。

先生は、一年から三年まで岩本清子先生で、目がねをかけておられ、声のきれいな方でした。四年は清木先生、五年は藤原先生、六年は河村隆夫先生で、髪をオールバックにしておられ、若くて熱心な先生でした。ある時、一部の男子の不まじめを連帯責任で、男子の大半を教壇に立たされ、ビンタをはられ涙を流して諭された事がありました。校長先生は小沢、上田、神代、山本校長先生で、今でもありありと先生方のお顔は目に浮かびます。現在三人の子どもたちがその課程を過しつつある時、ようやく先生のご恩の深さが身にしみ、頭のさがる思いがいたします。

五年生ごろまでは、秋は運動会で八代へ行ったり、大田原分校へ行ったりして、春は学芸会で、会場は大満員でたいへん楽しかったものです。

六年生になって、戦争もたけなわになり、食糧はすべて供出で不足し、世をあげて食糧増産に励んだものでした。学校の運動場は堀り起して甘藷を植え、学校でも勉強よりは作業が多く、丁の鍬を持っては登校する様になりました。

畑の避病院の後の竹やぶを開墾したのもそのころでした。少しの荒地も開墾しては甘藷や、南瓜を植えました。神代校長先生の時だったか、ねこ車を作って、学校でとれた南瓜をつんで、徳山の暁部隊へもっていった事がございました。

出征兵士の留守家庭の奉仕にも、よく行ったものでした。今は管野ダムの底になっている瀬戸のつり橋を

渡り、山の頂上から割木を背負って出したり、炭を運んだり、稲刈へ行っておやつに出たさつま芋のおいしかった事等、思い出されます。

青壮年はすべて戦地へ送り、残った者は一丸となって、銃後を守ったかいもなく、戦争はしだいに本土化して、空襲もはげしく、毎日の様に防空頭布をさげて、避難の練習をしたり、B29が編隊を組んで頭上を飛ぶのを先生の指導のもとに、二人、三人と別れて道路を這うようにして帰った事もありました。

小学生時代あの食糧難と、働く事を身をもって体験した私たちは、現在どんな不幸にもくじけることなく立ちあがることが出来ましたのも、そのおかげだとありがたく思っております。

雑感

旧職員　上田富三

私は、昭和二十年五月十日付きで、中須小学校長として任命され、始めて校長になったのでありますが、丁度大東亜戦争中で臨戦体制下の教育で、主として戦力増強の教育でありました。

中須小学校に、徳山からバスで赴任し、学校は、古い建物で運動場は、全部芋畑で戦時中の情景が、ひしひしと感じられました。

中須村は環境がよく静かな所で、人情が厚く、教育に熱心でよい所に来たものだ。と思いました。その上、先生方がよく協力されまして、心配なく、教育をすすめることが出来ましたことを、深く感謝しております。

又、当時の美濃津村長さんが、教育に理解援助されましたお蔭も、忘れることは出来ません。

時々、空襲警報のサイレンが鳴ると、児童全員を集めて、受け持ちの先生が引率され、防空頭巾をかぶった児童が、下校する姿が今も目に見える気がいたします。

学習面では、低学年は可成学習が出来ましたが、高学年は増産作業が主でありまして充分出来なかったことは、戦時中で気の毒であったが、仕方がなかったと思います。

朝礼の時は、「日本は必ず勝つ。」の天つき体操を、当番の先生の号令に合して頑張りつづけましたが、日本の戦況は悪く、遂に、八月十五日を迎え、ラジオで終戦の詔書が下ったことを聞き、児童を運動場に集めて、「日本が負けた。」ことを告げましたが、私も、先生方、児童一同が泣き伏した事は、一生忘れられないことでありました。

終戦後は、「軍国主義的用語を教科書から抹消せよ。」との指示で、全児童に教科書全部を学校に持参させ、教科書にある軍国主義的用語の箇所を墨で消させるのが日課で、正常な授業は手につかなかったように思います。

終戦後の昭和二十一年四月一日付で、山口県下の校長全員が転任するという大異動が行われ、私も大向小学校に転任することになりました。

中須小学校の在職期間は、十一ヶ月間で、大変短期間でありましたが、中須小学校在職中は、大東亜戦争中と終戦というダブルパンチを受けた時で、一生忘れようとして忘れることの出来ない印象深い学校となりました。

以上、大変簡単な感想で申し訳ありませんが、幸にして今日、私も元気で徳山市民の一人として、余生を送っております。

今回中須小学校開校百周年の年を迎えて感激に堪えません。

茲に、中須小学校開校百周年記念の年に当りますことを心より祝福申し上げますと共に、御発展をお祈り申し上げます。

思い出

旧職員　松村　元正

中須小学校の百周年にあたり、原稿の依頼を受けていささか当惑したが、多くの学校を遍歴し教員生活を終えた現在、特に印象の深い本校の記念誌に寄稿することを光栄に思い、輝やかしい百年の歴史にまず敬意を表したい。

不思議な縁で、昭和四年の春に中須を訪ねたことがあった。交通の便の悪かった時のことである。徳山から徒歩で未知の中須へたどり着いた時の印象が、今も心に残っている。当時、まだ学生であったが、中須小の校庭に佇んだ時、校舎の上にうつ蒼と繁り合う楠の木や、樅の大木がたくましくそそり立っていた。その学校環境がいかにも重々しく感じられ、何かしらゆかしさに魅せられたことが思い出されてくる。

昭和二十一年に外地から引き揚げて、県内再就職の辞令を受けたのが中須小であった。戦争という大きな波に耐え抜いた、校庭の樅や楠の木の大木は、戦後の学制改革や激動する社会を、見守るかのごとく繁り合い年輪を重ねていた。